

380 乳癌における骨転移とf因子との関連

戸川貴史、樋口義典、鈴木 晃、
加藤和夫、小林克子（福島医大 核）

乳癌の骨転移出現は種々の予後因子によって左右されている。今回、我々は乳腺外脂肪組織への癌浸潤の有無を組織学的に検討し（f因子）、stage、WHO組織型分類、乳癌取扱規約分類、menopausal state、およびn因子と比較した。f(-)群での骨転移陽性率は10.6%であったが、f(+)群での陽性率は37.1%であり、有意に上昇していた($p < 0.005$)。stage Iにおいてはf(-)とf(+)とで骨転移陽性率に差を認めなかったが、stage IIとstage IIIにおいては、いずれもf(-)に比しf(+)群で骨転移陽性率は有意に上昇した($p < 0.005$)。また、WHO分類によるinvasive ductal carcinoma 85例において検討すると、f(-)群22例中骨転移は1例のみ(4.5%)であったのに対し、f(+)群63例中骨転移は25例(39.7%)に認められ($p < 0.005$)、同一の組織型においてもf(+)では骨転移の頻度が有意に高かった。f因子は乳癌の重要な予後因子の一つであり、骨転移出現にも密接な関連があると考えられた。

381

Tc-99m MDP の乳癌への集積に関する検討

加藤真吾、杉山純夫、岡崎篤、宮石和夫、
新部英男(群馬 放) 伊藤潤(前橋日赤 放)
山川通隆(松戸市立 放)

骨シンチグラム用核種の乳腺腫瘍への集積については既に多くの報告がなされているが、今回われわれは乳癌新鮮症例の骨シンチグラムを中心にその集積程度と、患者の年齢、腫瘍のTNM分類、組織型、hormone receptorの有無、micro calcificationの有無との関連について検討を加えた。

使用した放射性医薬品はTc-99m MDPを原則とし、20mCi 静注後3時間の全身シンチグラフィを行なった。

それらの結果では、全体の約1/3に患側乳房への集積増加が認められた。hormone receptorとは関連が全く認められず、陽性症例の大半はT3、T4症例であり、T因子との関連が最も高かった。T3、T4症例にもかかわらず陽性を示さなかったものもあり、これらについてもさらに検討を加える。

382 子宮癌の骨シンチ

松本誠一、金田浩一、峯博子（癌研病院放射線科）
川口智義、網野勝久、真鍋淳（同 整形外科）
藤本郁野（癌研病院婦人科）

子宮癌は、骨転移を生ずることが比較的にまれな疾患であるため、本症の骨シンチ所見に関する報告は少ない。我々は1979年1月から1983年12月までの5年間、臨床所見あるいは骨Xpから子宮癌の骨転移を疑い骨シンチを施行した247例を経験したので報告する。症例は全例当院婦人科にて原発巣の治療が施行されている。骨シンチ上陽性例は87例であったが、false positiveに出た症例も少なくなかった。その原因としては、放射線治療による骨盤部骨壊死があげられる。その他、本症の読影に関する注意点につき報告する。

383

前立腺癌と骨シンチグラフィー

—長期観察例の検討—

吉越富久夫、町田豊平、三木 誠、大石幸彦、
上田正山、木戸 晃、柳沢宗利
(慈恵医大 泌)

全身骨スキャンは前立腺癌に対する必須の検査である。しかし前立腺癌の腫瘍マーカー、PAPがさかんに臨床応用されている今日、経過観察のうえでの全身骨スキャンの意義をあらためて検討した。

対象は1976年7月以降の約7年間に前立腺癌の診断のもと、抗男性ホルモン療法を主体に治療し、2年以上くり返し全身骨スキャンを行っている27症例である。それらの臨床病期はstage I～Ⅲが12例、stage Nが15例である。stage I～Ⅲの12症例中、経過観察中に骨転移を認めたものは4例(33%)であった。stage Nの15症例についてみると、骨スキャン上、増悪の認められたもの6例(40%)、改善の認められたもの4例(27%)、変化の認められなかったもの5例(33%)であった。

血清PAP陽性例の骨転移率をみると、10ng/ml以上の場合70%、100ng/ml以上の場合100%であった。しかし再燃例ではPAPの上昇から必ずしも転移病巣の増悪は推測出来ず、経過観察時にも改めて、全身骨スキャンの有用性が確認された。